

折形と 折り紙

渡辺仁史



think the future from

hitoshi watanabe lab.

●かたちに宿るこころ

私が日常的にやっている「紙を折る」きっかけは、指先を使うことで認知症予防になると知ったからで、幸い三日坊主にもならず続けることができています。

■礼のかたちとしての「折形」

日本人は古くから、紙に思いを託してきた民族である。文字をしたためるだけでなく、紙を折ることそのものに「心」を込めてきた。その象徴が「折形（おりがた）」である。

室町時代、武家社会における贈答の作法として生まれ、小笠原流や伊勢流などの礼法家によって体系化された。贈り物を包む折り方には厳格な決まりがあり、それを守ることが相手への敬意を示すとされた。

紙は単なる包装ではなく、「心を包む器」であり、折る行為そのものが礼の表現であった。折形はやがて祝儀袋やのし袋などの原型となり、礼節と清浄をかたちにした日本文化の一つとして受け継がれている。

■遊びのかたちとしての「折り紙」

これに対して「折り紙（おりがみ）」は、江戸時代に生まれた庶民の文化である。紙の普及とともに、寺子屋での手習いや遊びの中で発展し、子どもの情操教育や行儀作法の訓練にも用いられた。

1797年に刊行された『秘伝千羽鶴折形』は、世界最古の折り紙書として知られるが、その題名に「折形」とあるのは、礼法としての折形から遊戯的な折り紙へと文化が移行する過程を物語っている。

折り紙は、遊びの中にも秩序と美を見出し、創造性を育む「学びの芸術」として今日まで広がり続けている。

■共通する「こころ」と現代への継承

折形が「礼のかたち」であり、折り紙が「遊びのかたち」であるとするれば、両者に通底するのは「紙を折って心を形にする」という精神である。

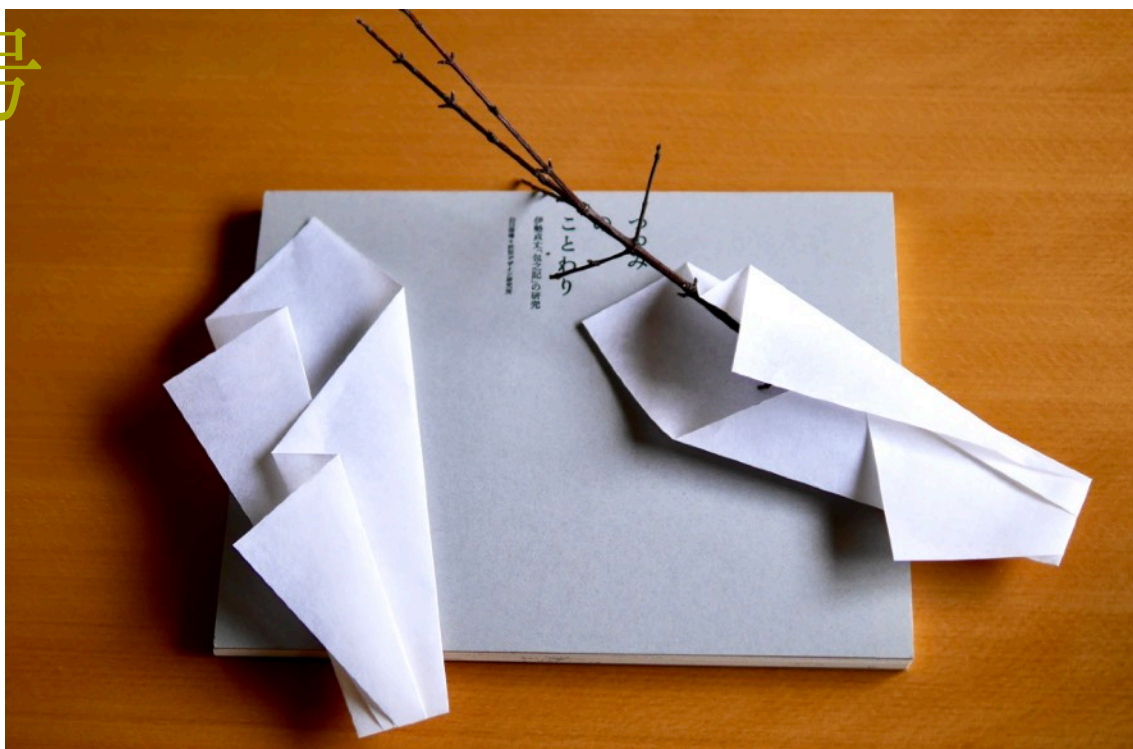
一枚の紙に手を添え、折り目を重ねるとき、人は自らの心を整え、思いを形にしている。そこには、無から有を生み出す創造と、心を鎮める折りが同居する。現代の私たちは、包装紙や折り紙を何気なく使うが、その奥には、静けさと自由、礼と遊び、形式と創造という二つの世界を結ぶ日本人の感性が息づいている。

紙の一折りに宿るのは、時代を超えて受け継がれる「こころ」の文化なのである。

News Paper

第38号

2025.12.01



折形「木を贈る」